

群 教 セ	G10 - 01
	平17.227集

# 命を意識し大切にしようとする 心情をはぐくむ道徳指導の工夫

## — 命の尊さを感じ取る活動を通して —

特別研修員 金井 恵美子 (榛東村立南小学校)

### 《研究の概要》

本研究は、小学3年生を対象に、命の大切さを実感としてとらえる道徳の指導について、実践的に研究したものである。具体的には、アゲハの生きようとする姿を観察し作成した読み物資料での話し合い活動、養護教諭とのT・T指導で、生きるための体の働きを知る活動や病気と闘う少女の話を書く活動、児童の誕生や病気・けがについて書かれた保護者からの手紙を読む活動を「道徳の時間」に取り入れて実践を行った。

**キーワード** 【道徳 小学校3年 生命尊重 飼育観察 養護教諭 保護者からの手紙】

### I 主題設定の理由

昨今、人間関係の希薄さや命の軽視という問題が表面化してきている。現代の子どもたちは、核家族化や少子化により、人の死や誕生に直接かかわる経験が少なく、また、ゲームなどで登場人物が簡単に死んだり生き返ったりする経験を繰り返している。そのため、自他の生命の尊さや生きることのすばらしさを自覚しないまま大人になってしまうのではないかと危惧される。

本学級（小学校3年男子18名女子10名計28名）の児童は、外遊びが好きではあるが、遊びの中心は、テレビゲームや携帯ゲームで、「人は死んでも生き返る」と考えている児童がいた。また、アンケートからは、言葉の上で「命は大切である」と理解しているが、児童を取り巻く生活の中は、命の重さや尊さを感じ取る機会が少なく、「自分がどれほどかけがえのない存在であるか」を感じ取っていない児童もいることがわかった。また、これまでの生命尊重の授業が、表面的な「命は大切である」の指導になりがちであったという反省から、直接児童の心に響くような授業展開ができればいいと考えた。

そこで、命の尊さ・かけがえのなさを児童に実感させ、自尊感情を芽生えさせるような活動を取り入れれば、児童は命の尊さを感じ取り、より命を意識し大切にしようとする心情をはぐくむことができるであろうと考え、本主題を設定した。

### II 研究のねらい

「道徳の時間」に、命の尊さを感じ取る活動を取り入れれば、児童が、より命を意識し大切にしようとする心情が育つことを実践を通して明らかにする。

### III 研究の見通し

- 1 道徳1主題名「小さな命」において、児童の観察記録や作文を資料化した「アゲハチョウがとんだ」を使い、アゲハの成長や一生懸命生きぬこうとする姿に迫る話し合いをすれば、命を意識し、動植物をより大切にしようとする気持ちをもつことができるであろう。
- 2 道徳2主題名「生きている」において、養護教諭とのT・T指導で、心臓の動きなどを知る活動や病気と闘う少女の話を書く活動をすれば生きるための体の働きについて感じ取り、自分や友達の命について意識することができるであろう。
- 3 道徳3主題名「大切な命」において、児童が、自分自身の誕生や病気・けがについて書かれた家族からの手紙を読む活動をすれば、自分自身が、かけがえのない存在であると感じ取り、命を意識し大切にしようとする気持ちが高まるであろう。

#### IV 研究の内容

##### 1 基本的な考え方

###### (1) 目指す児童像について

3年生という児童の実態から、現段階での「命を意識し大切にしようとする児童」とは、次のような姿であると考えた。

○身のまわりの動植物が一生懸命生きぬこうとする姿を感じ取り、大切に世話をしたり自然にかえしたりしようとする子。

○自分の命が、やっと生まれ大切に守られてきた、かけがえのない命であることを感じ取り、健康で元気に過ごそうとする子。

###### (2) 命の尊さを感じ取る活動について

児童の日常生活の中は、命を意識する機会が少ないという実態を踏まえ、児童一人一人に「命を大切にしようとする心情」をはぐくむためには、生きていることのすばらしさやかけがえのなさを感じ取らせ意識させることが有効であると考えた。そこで、「道徳の時間」の中に、命の尊さを感じ取る活動を取り入れようと考えた。3年生で

の発達段階や学習内容との関連を図りながら、以下のア・イ・ウの活動を取り入れて授業を構想した。

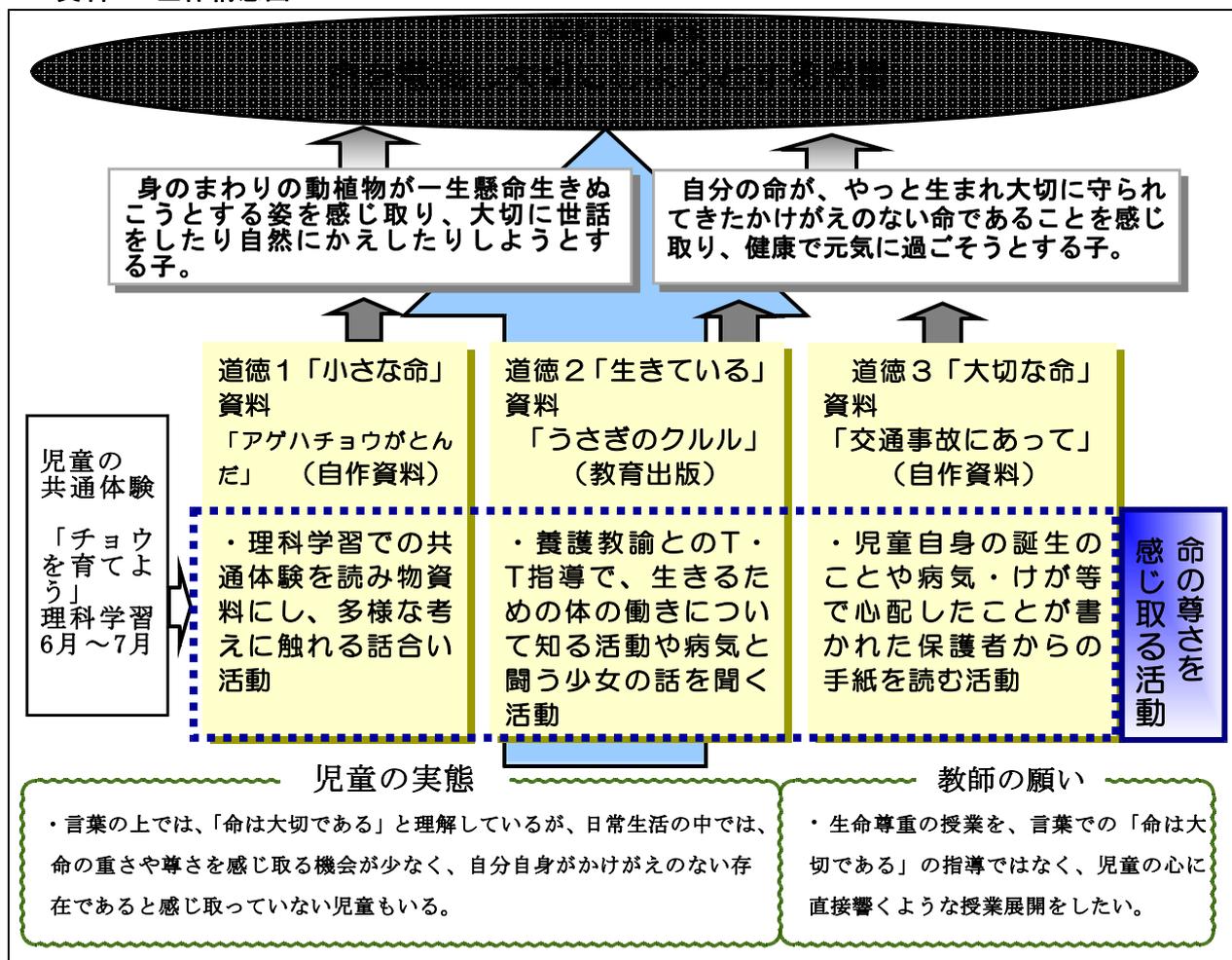
ア 理科学習での共通体験を読み物資料にし、多様な考えに触れる話し合い活動

理科の学習「チョウを育てよう」において、アゲハチョウの生と死を正面から見つめた児童の観察記録や作文を資料化し、読み物資料として活用する。そして、話し合いの場面では、アゲハの一生懸命飛ぼうとする姿を見守った共通体験を中心に、児童の思いや本音が出るような発問を工夫する。そうすることで、児童は、自分の考えと友達からの多様な考えを比較したり付加・修正したりしながら、価値の自覚を深めることができると考えた。

イ 生きるための体の働きについて知る活動や病気と闘った少女の話を書く養護教諭とのT・T指導

養護教諭とのT・T指導を行い、児童が、自分たちの心臓の音を聴診器で聴いたり、呼吸・目の反射などを確かめたりする活動を「道徳の時間」

資料1 全体構想図



に取り入れる。その後、養護教諭から病気と闘い精一杯生きようとする小児病棟の少女の話の聞けば、普段は意識しない生きるための体の中の働きを知り、生きていることのすばらしさや命の重みを感じ取ることができると考えた。

ウ 児童の誕生や病気・けが等が書かれた保護者からの手紙を読む活動

保護者からの手紙は、児童に命の尊さを感じ取らせる重要な教材であると考え。そのため、個々の児童に配慮しながら、事前に保護者の了解を得て協力をもらうことが必要である。手紙の内容については、保護者に児童の誕生や成長する中での病気・けが等を振り返ってもらい、その時の様子や思いを書いてもらう。

授業においては、児童一人一人が保護者からの手紙を読む場面を設定し、自分自身の誕生や成長する中での保護者の思いを知るようにした。手紙から、自分がやっとな生まれ大切に守られてきたかけがえのない命であることを感じ取ることができれば、命を意識し、より命を大切にしようとする心情がはぐくまれるであろうと考えた。

### (3) 全体構想図 (資料1)

## 2 実践の概要及び結果と考察

### (1) 命を意識し、動植物をより大切にしようとする気持ちをもつことができたか。(見通し1)

#### ア 実践の概要

道徳1「小さな命」の授業で扱う資料は、アゲハの飼育・観察を通して、児童が書き残した記録や作文を資料化した「アゲハチョウがとんだ」である。内容は、「世話をしていたアゲハの中の1匹が、羽が1枚縮んで羽化してしまい、バランスが取れずうまく飛ぶことができない。そのアゲハを『教室で飼うのか』『逃がしてやるのか』でみんなの意見が分かれ、主人公の僕はどうしていいか困ってしまう。その後、外に出すだけでも出してみようとしたところ、アゲハは羽を一生懸命動かし、かたむきながらも空高く飛んでいった」というものである。

授業では、アゲハの成長してきた過程や精一杯生きようとする姿を振り返りながら、うまく飛べないアゲハを「教室で飼うのか」「逃がしてやるのか」で意見が分かれた場面を中心に話合った。児童からの多様な意見に対しては、「なぜそう思ったのか」理由まで考えさせながら、児童の内面が出るように発表させ、自分の意見と比較させた。

そして、アゲハが一生懸命羽を動かして飛んでいく場面では、児童の気持ちを道徳プリントに記述させた。

展開後半の場面では、児童の心の内を探るため、児童にとって身近な生き物に視点を広げ、生き物のことを考えてしたことやこれからしたいことを記述し発表し合った。

#### イ 結果と考察

道徳1の授業では、児童の共通体験を読み物資料としているので、話合いの場面においては、奇形のアゲハが誕生したことや飛ぼうとした時のことを思い出しながら、アゲハに対して考えたことを理由も入れて発表し合うことができた。

「教室で飼いたい」という児童の理由は、「うまく飛べずカマキリに食べられるのなら、ぼくたちが大切に育てる方がいい」「外は危険がいっぱい」「教室の方が長く生きられる」などだった。

「逃がしてやりたい」という児童の理由は、「せっかくチョウになったんだから空を飛ばせたい」「自然にかえしたい」「アゲハは飛びたがっている」「もしかしたらうまく飛べてたまごをうめるかもしれない」などだった。児童は、話合いの中で、自分以外の多様な考えに触れながら、だれもがアゲハの命について考えていたことを確認し合うことができた。

アゲハの生きようとする姿を観察した共通体験が、読み物資料になったからこそ、「道徳の時間」において、アゲハの命をより感じ取ることができ、「生きていてほしい、自然にかえしたい」という児童の内面を発表し合うことができたと考える。

抽出児A男、抽出児B子は、アゲハが空高く飛んでいく場面において以下のように記述した。

#### 資料2 アゲハが飛んでいく時の気持ち(A男)

・「ぶじにとんで行ってよかった。」と思った。

#### 資料3 アゲハが飛んでいく時の気持ち(B子)

・とんでよかったな。生きてて、よかったな。  
自由になってよかったね。  
食べられないようにね。

A男はアゲハに愛着を感じ、「飛べないと心配していたが、何とか飛ぶことができてよかった」と感じていることが分かる。A男は、数日後クワガタをつかまえたが、逃がしたことを詩に表した。

「クワガタをたくさんとった。みんなほしいと思ったけれど、おすとめす1ぴきずつのこしてにがしたよ」と書いた。残した雄雌については、「大切に育て卵を産ませたいな」と話した。このことは、A男が、授業から生き物を自然にかえす大切さを感じ取り、道徳的実践へつながったと考える。

B子は、幼虫の世話をするようになってから、よく家で幼虫のことを話題にし、「死んだりしないで、みんなチョウになってくれたらいいのに」と話していたことを母親から知らされた。資料3の記述からも、B子がアゲハの命を考え、「食べられたりせず、自然の中で自由に生きてほしい」と願っていることが分かる。また、身近な生き物についての記述では、家で飼っていたメダカが卵を産んだことを喜び、今まで以上に大切に世話をしていきたいことが書かれていた。

以上のことから、体験したことを資料として話し合い活動をしたことで、アゲハに対する思いが積極的に出され、児童は友達の多様な考えに触れることができた。そして、児童の考えに変化が見られ、ほかの生き物に対しても命を大切にしようとする気持ちをもつことができたと考える。

## (2) 生きるための体の働きについて感じ取り、自分や友達の命について意識することができたか。(見通し2)

### ア 実践の概要

道徳2「生きている」の授業で扱う資料「うさぎのクルル」(教育出版)は、「うさぎが以前死んでしまった経験をもつ主人公『まい子』さんが、とまどいながら次に世話をすることになったうさぎ『クルル』とのかかわりの中で、事件が起きる。しかし、クルルの心臓がしっかり動いていることから、元気に生きていることを喜ぶ」という内容である。児童は、クルルが元気になったことに安堵し、心臓の音を「生きているしるし」と感じ展開後半に入る。

展開後半では、養護教諭から、生きるために休まず働く心臓について教えてもらい、聴診器を使いながら心音を聴く活動をした。次に、口と鼻の前に手をかざし、自然と息が出てくる呼吸の様子や、友達の目の前で手を叩き、目を守るまばたきの様子を知る活動をした。その際、担任は児童側に立ち、児童に話しかけながら、活動を支援したり一緒に喜び合ったりした。

最後に養護教諭から、小児病棟で死と向き合いながら精一杯生きようと病気と闘った少女の話を

聞き、「残念だけど死んでしまうと、心臓も動かないし呼吸やまばたきもできないんだよ」「生きているって当たり前のように思うけれど、本当はすごいことなんだね」という話を聞き、児童は、授業の感想を書いた。

### 資料4 養護教諭が説明しているところ



胸と胸の間を押さえて静かに聞いてね。

### イ 結果と考察

聴診器を持った養護教諭が登場すると、児童は「病院の先生が持ってるやつだ」と歓声を上げ、これからの学習に興味をもった様子が分かった。心音を聴く場面においては、養護教諭も児童の支援に当たり、心音と共に血液の流れる音に気がついた児童には、説明を加えていた。授業後、その児童は「血液の流れる音がきこえた。血液の流れる音も生きているしるしだと思った」と感想を書いていた。養護教諭とのT・T指導を行ったことで、児童の興味関心が高まっただけでなく、専門的な立場で対応でき、短時間で全員の児童が自分や友達の心音を聴くことができた。児童からは、「すげえ」「思ったより音がでかい」と心臓の音を感じ取ったつぶやきや、「心臓が止まると死んじゃうんだよね」という命について意識したつぶやきが聞こえた。無理して息を止めていた児童もいたが、すぐに苦しくなってしまう、生きていくためには呼吸をしなければならぬことを感じ取っていた。目の反射では、「目を守るためにまばたきをするんだ。こわいからだと思っていた」と自分たちの体について理解を深めた児童もいた。

病気と闘う少女の話では、「冷たくなっちゃたの」「かわいそう」と、もうもどらない命を悲しむつぶやきが聞こえた。

命の重みや有限性について、授業前に調査したアンケートでは、死んでも生き返ると答えていた児童が3名いたが、授業後は、全員の児童が死んだら生き返ることができないと答えた。このことは、養護教諭の話から、児童が命の重みや有限性に気付くことができたと考えられる。また、授業後の

感想で、「生きていることは当たり前じゃない」「生きてるってすごい」「女の子の分まで生きなきゃいけないように思った」など、多くの児童が命の尊さや命を意識した記述ができた。

#### 資料5 心臓の音を聴いての感想 (A男)

・自分の心ぞうの音をきいて、生きててよかった。

抽出児A男は、心音を聴く場面では、心臓の場所がよく分からず聴診器を動かしていたが、心音が聴こえると、「あ、音がするよ。音がするよ」と笑顔で訴え、資料の「クルル」と同じように元気であることを喜んでいて、A男はこの授業で、今まで場所すらよく分らなかった心臓について興味をもち、自分の心音を聴くことができた。感想の記述からも、A男が、生きていることを改めて意識することができたと考えられる。

#### 資料6 心臓の音を聴いての感想 (B子)

・生きているということがわかった。〇〇ちゃんのしんぞうの、ドキッ、ドキッ、という音がきこえた。〇〇ちゃんも元気だなと思った。

B子は、自分の心音が分かると、すぐ近くにいたなかよしの〇〇さんの心音を聴き、小さい声で歓声を上げながらお互いの心音を聴き合っていた。B子は、「人は死んでも生き返るような気がする」と答えていた児童の1人であったが、授業後のアンケートで、「死んだら生き返ることができない」に変容していた。このことは、実際に自分と友達の元気に動く心臓を実感した後、病気と闘った同世代の少女の話聞いたことで、命をより意識することができたと考えられる。

以上のことから、養護教諭とのT・T指導で、生きるための体の働きについて知る活動や少女の話聞く活動をしたことで、児童は、より自分や友達の命について意識することができたと考えられる。

**(3) 自分の命がかけがえのない命だと感じ取り、命を意識し大切にしようとする気持ちを高めることができたか。(見通し3)**

#### ア 実践の概要

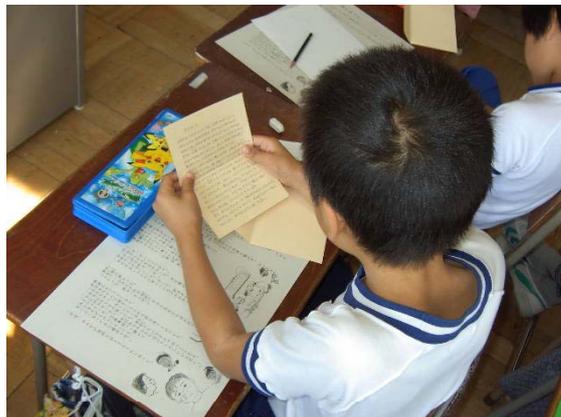
道徳3「大切な命」の授業で扱う自作資料「交通事故にあって」は、「お母さんの注意も聞かず自転車に乗った主人公一平が、友達と遊ぶために

急いで公園に向かう途中で交通事故にあうところから始まる。強く腰を打ち、動くこともできず死の恐怖を感じながら救急車で病院へ運ばれる。幸い骨折ですむが、両親の心配する姿や妹・おばあちゃん・友達の励ましの言葉から、家族の愛情や多くの支えに守られている自分に気付き、感謝の気持ちとともに、かけがえのない命を大切にしていこうという気持ちをもつ」という内容である。授業では、一平に自分を投影しながら、心情の変化を追うようにした。

展開後半では、事前に保護者に依頼して用意しておいた手紙(児童の誕生や成長に対する喜びや病気やけがで心配したことなどを含む)を児童一人一人に手渡し、じっくり読む時間を取った。そして、自分の誕生や育つ過程での病気やけがについて、家族がどんなことを思っていたかを発表し合った。児童は、自分が家族にとってかけがえのない存在であることを感じ取りながら、やっと生まれてきた命・大切に育てられてきた命であることを意識し、だれもがかけがえのない命をもっていることをとらえた。

授業後、命を大切にしていけるために「ぼくは私は、どんなことに気をつけていきたいと思いますか」の問いに対し、児童一人一人が気をつけていきたいことを書いた。

#### 資料7 保護者からの手紙を読む様子



#### イ 結果と考察

児童は、資料の中で一平のことを本気で心配している家族やまわりの友達の姿から、一平に自分を投影し、「もう、飛び出さない。気をつけよう。みんなに心配してもらってうれしい。早く元気になろう」などの意見を発表した。

展開後半、保護者からの手紙を受け取った児童は、自分の誕生や成長に対して初めて知ることも多く、「うれしい。涙が出ちゃいそう。こんなことがあったなんて知らなかった。もう心配かけな

い」などのつぶやきが、あちらこちらから聞こえた。また、感想の発表場面でも、「ぼくのことを『やっとさずかった命』とお母さんが書いてくれたことが、なんかジーンときた」「私が生まれる時、お父さんだけでなく、おじいちゃんやおばあちゃんまで病院に来てくれてうれしかった」などの意見が次々に出された。授業後のアンケートで、「手紙をもらったことで、自分の命がかけがえのない大切な命であると感じ取れたか」の問いに対し、全員の児童が「感じ取れた」「だいたい感じ取れた」と答えた。これらのことから、保護者からの手紙は、児童の心に響き、児童は自分の命が尊いものであることを感じ取ることができたと考える。

抽出児A男は、手紙をもらう際、てれくさそうであったが、内容を読み始めると、「なんか泣いちゃいそうだよ」と何度もつぶやいていた。そして、自分が母親の破水後にやっとのことで生まれたことを参観した先生方にうれしそうに話しかけていた。感想の内容やA男の言動から、A男は、自分が家族にとってかけがえのない存在だと実感し、うれしかったのだろうと考える。

#### 資料8 手紙を読んだ後の感想 (A男)

お母さんは、ぼくがぶじに生まれるか心ばいしたんだって思った

抽出児B子は、何度も何度も手紙を読み返し、自分の誕生について確認し喜びを感じながら時間をかけて感想を書いていた。書かれた感想は、以下の通りである。

#### 資料9 手紙を読んだ後の感想 (B子)

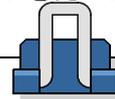
せっぱくりゅうざんで、お母さんは、私が死んじゃうかと思って、かみさまに「かみさまどうか赤ちゃんを助けてください。」と言ったそうです。そして、毎日毎日、そのことを考えていたそうです。私が死ななくてよかったなと思ったそうです。私は、うまれてよかったです

B子の記述より、B子は、自分がもしかしたら生まれてこなかったかもしれないと感じ、誕生したことを喜んでいることが分かる。また、母親からは、「B子が授業後家に帰り、母親に対し『ありがとう』と話したとや、お手伝いを進んでする

ようになった」と伝えられた。これらのことは、B子が、かけがえのない自分自身の命を意識し、誕生した喜びや家族に対する感謝の気持ちを「ありがとう」の言葉やお手伝いという行動で示したと考える。

授業後のアンケートで、「ぼく私は、どんなことに気をつけていきたいと思いますか」に対する児童の記述をまとめると、資料10のようになる。

#### 資料10 気をつけていきたいこと(複数回答あり)



- ・交通事故に気をつけたい。 (9人)
- ・飛び出しをしないようにしたい。 (9人)
- ・自転車に乗って暗くなったら  
ライトをつけるようにしたい。 (7人)
- ・知らない人についていかない。 (6人)
- ・防犯ベルを持つ。 (6人)
- ・健康に気をつけたい。 (5人)
- ・暗くなる前に家に帰る。 (4人)
- ・手あらいうがいをする。 (3人)
- ・友達にやさしくしたい。 (3人)
- ・その他 (各1人)
- いじめをしないようにしたい。
- 包丁には気をつけたい。(お手伝いの時)
- 火遊びはしない。
- あせって行動をしない。
- 調子に乗りすぎないようにしたい。
- 一人で遊んでいる友達に声をかける。

記述の理由は、「家の人に心配かけたくないから、けがや病気になりたくないから、やっと生まれた大切な命だから、ぼくの代わりはないから、友達は大切だから」が多かった。このことは、保護者の手紙が、児童の心に響き、自尊感情を芽生えさせたことにより、児童が、健康や安全に気をつけ、命を守り大切にしたいという心情につながったと考える。

以上のことから、保護者からの手紙む活動をすることで、児童は、自分がかけがえのない存在であることを感じ取り、命を意識し大切にしようとする心情を高めることができたと考える。

## V 研究のまとめと今後の課題

### 1 研究のまとめ

○児童は、飼育した共通体験を読み物資料にして

話し合ったことで、積極的に自分の意見が発表でき、友達の多様な考えに触れながら、生き物に対する思いを深めることができた。また、養護教諭との活動や病気と闘った少女の話聞いたことで、普段意識しない体や人の命について考えることができた。また、保護者からの手紙を読んだことで、家族にとって自分がかげがえのない存在であることを感じ取り、その喜びがよりよく生きたい（健康で元気に友達と仲良く）という思いにつながった。

以上道徳1・2・3の実践から、児童は、体験を伴う活動によって、命とは尊くかけがえのないものであることを実感することができ、命を大切にしていこうとする心情をはぐくむことができた。

## 2 今後の課題

本研究は、3年生の児童を対象に、命の大切さを実感としてとらえる道徳の指導について、実践的に研究したものである。今後は、「道徳の時間」だけでなく、教育活動全体の中で、命の尊さを実感できる展開を工夫し、作文や日記指導の中でも変容を探りながら、児童一人一人により命を大切にすることを心がけていくことが課題である。また、年間計画を見直し、各学年において、系統的に命の尊さを実感できる指導を取り入れ、自他の生命の尊さや生きることのすばらしさを指導をしていくことが課題である。

〈参考文献〉

- ・押谷 由夫 編著『新学習指導要領を生かした道徳の授業No.2』 小学館 (2002)
- ・向山 洋一監修 河田 孝文編 『「生命の授業」を創る』 明治図書 (2004)
- ・『道徳教育5月号』 明治図書 (2005)
- ・『道徳と特別活動10月号』 ぶんけい (2005)

(担当指導主事 峯岸 哲夫)